

## 2023年度 事業報告

施設名 東北沢つどいの家

### 1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 7人 利用者数 9人

#### (1) 障害支援区分

区分6	9人	区分5	0人	区分4	0人	区分3以下	0人
計	9人						

#### (2) 障害の程度

		身体障害者手帳				計
		1級	2級	3~7級	なし	
愛 の 手 帳	1度					0人
	2度	3人				3人
	3~4度					0人
	なし	6人	0人			6人
計		9人	0人	0人	0人	9人

#### (3) 年齢、性別

10代以下	0人	40代	2人
20代	4人	50代	1人
30代	2人	60代以上	0人
計			9人

男性	4人
女性	5人
計	9人

### 2 事業実施状況

#### (1) 活動・支援の内容

- 開所日数 246 日で延べ利用者 1474 人、一日平均 5.9 人の利用で、年間利用率 85.5%だった。前年度と比べると、平均で 0.4 人減り、利用率で 6.2%減少した。1 月より週 1 での利用だった女性利用者が週 2 利用に増えたものの、週 3 で利用されていた男性利用者 1 名が、昨年 7 月より家庭の事情により都外の施設にミドルステイ利用に入った事が利用率の低下に大きく反映されている。
- 世間的にアフターコロナと呼ばれるようになったものの、コロナそのものの毒性や感染力が弱まった訳ではない為、訪問支援利用者の利用再開はできなかった。今後も状況の改善を見ながら慎重に対応する。
- 事業所内の感染対策に加え、利用者各家庭での協力もあって、施設内での感染拡大などに繋がらず事業を継続できた。
- アフターコロナとなり、徐々にではあるが、対面での交流や対外活動を再開している。保護者会を久々の対面で開催し、保護者との個別支援計画の面談や家庭訪問も再開した。世田谷ボランティア協会のナツボラ受け入れも再開し、玉堤つどいの家との利用者交流会もオンラインではなく対面での形で再開した。また昨年に続き近隣住民を迎え入れてのレザークラフト販売会を開催したり、少人数や個別で近所に飲み物や昼食を買いに行ったりした。
- 所属する利用者の地域生活の維持のために相談支援事業所やケースワーカーやケアマネジャー、成年後見人など、関係する多くの職種と連携しながら支援状況の確認や情報の共有を行った。

* 行事等	* 一日のスケジュール
・4月 三者面談	8:30 職員ミーティング
・5月 健康診断 (9・12・6/1・6/5日)	9:45 来所時間
法人総会 (30日)	10:00 朝の準備・朝のミーティング
・6月 防災教室 (17日)	10:15 午前の活動
・7月 コロナワクチン接種 (15日)	11:30 昼食・昼休み
暑気払い (29日)	14:00 午後の活動
・8月 ナツボラ受け入れ (3・4・10日)	15:15 帰りのミーティング・帰り支度
・9月 つどいのわ発送 (28・29日)	15:50 退所時間
・10月 レザークラフト販売会 (21日)	16:20 職員会議 ほか
インフルエンザワクチン接種 (24日)	
三者面談	
・11月 避難訓練 (14日)	
光明学園教諭研修受入 (17・12/8日)	
コロナワクチン接種 (18日)	
・12月 年賀状作成 (11・12日)	
忘年会 (28日) 冬休み (29~1/3日)	
・1月 新年会 (29日)	
・2月 玉・東利用者交流会 (6日・9日・3月28日)	
・3月 保護者会 (11日) 納会 (30日)	
* 日中活動内容	
・ セルフ	「自分の時間の使い方やスケジュール管理を経験すること」を趣旨として、毎月頭のスケジュール決めの際に、利用者は「この日のセルフ活動は何をする時間にするか」を考えた。自分が担当となるフリーの内容を考える時間にも活用した。
・ ミーティング	月間スケジュールや行事内容の確認・振り返り等を全員で話し合い、「自分の考えた事をしっかりと伝える」機会としての活動。司会役含め、利用者は可能な限り活動進行に携わった。
・ イベントミーティング	暑気払い、つどいのわ編集、忘年会、納会で、利用者が担当に分かれて、企画・準備をする。出来るだけ自発的な意見を引き出せるような話し合いを行った。
・ レザークラフト	事業所前にて開催する「レザークラフト販売会」などに向けて、各々自分が担当した製品の完成に向けて活動に取り組んでもらった。「レザークラフト販売会」だけでなく、玉堤やぽーとでの委託販売も行った事で、売れ行きは上がり、製品が売れたことで利用者のやりがいにつながった。
・ 美術表現	4月：ネモフィラ、5月：水族館にいる生き物、6月：和菓子、7月：夏祭り（イメージ）、8月：夏野菜、9月：パン、10月：パンジー、11月：年賀状（龍）、12月：冬、1月：はり子戌、2月：絵手紙、3月：インコ 季節を反映した、利用者のイメージしやすい物をテーマに設定。出来るだけ自分達の力量のみで、作品を仕上げてもらった。
・ 美化	館内の清掃や、スケジュールボード作成など、日常から利用している空間の整理整頓を、各利用者出来る範囲内で携わってもらった。
・ サークル	「楽しみながら自分で身体を動かす」ことを目的として、ボーリングや風船バレーなどをゲーム性の高い内容で活動した。坊主めくりなど、季節性に入った物も取り入れた。ルールを調整し、参加者皆が楽しめる内容にした。
・ リハビリ (PT)	隔週で理学療法士の専門的な指導を受けた。 毎回、活動後に職員全員で振り返りを行い、利用者個々の状況を確認しながら今後

	予想される問題や生活環境の変化を共有して対応できるように話をした。
・ リラックス・リハ	利用者の車イスから降りる機会として、各利用者の状況に合わせた内容（ゆっくり身体を伸ばす機会にしたり、あるいは体を動かす機会にしたり）にて実施した。
・ フリー	毎月1回、利用者が1名ずつ、担当者として活動内容を企画、準備した。「みんなと一緒にやりたい事を考えて実行する」ために、それぞれの方に合わせたサポートをしつつ、出来る限り自分達で企画進行を行ってもらった。
・ 生活	職員が進行役となって、クイズなど、「楽しみながら頭を使う」といった要素も加えて、利用者の知識や見識を広げるきっかけになるような内容を取り上げた。世の中の様々な事象や時事の話に興味を持ってもらうきっかけになった。

## (2) 地域交流

・ 地域社会との積極的な交流にはまだ至っていないものの、秋のレザークラフト販売会開催の際は、チラシを関係者だけでなく、近隣住民にも配布し、関係者以外の一般の来客を対象にした販売活動を展開した。
--------------------------------------------------------------------------------------------------

## (3) 家族、関係機関との連携等

・ 個別支援計画の三者面談や家庭訪問など、対面でのやり取りを再開した。年度末には保護者会も開催し、次年度の活動予定や情報交換を行なっている。
・ 高齢の保護者との生活が難しい状況（8050問題）に対して、行政や高齢福祉とのケース会議で情報を共有するなど、多職種連携に努めた。

## (4) ボランティアや実習生の受入れ

・ 世田谷ボランティア協会ナツボラ、光明学園中堅教諭研修生など、外部からの来所者の受け入れを再開した。また他区の高校生や施設間移動希望の方々が見学に來たり、以前から関わっていたボランティアが久々に来所したりと、利用者にとっては普段関わる機会の少なかった方々との貴重な交流の機会となった。
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## (5) 危機管理

・ アフターコロナに入ったものの、嘱託医の指導もあり、引き続き感染対策には留意して取り組んでおり、事業所内での感染拡大はなかった。
・ 新しい防火管理者を迎え、区民集会所を管理する区と改めて、それぞれの管理権限の確認・整理をする事が出来た。
・ 町会など地域との災害時の連携については、引き続き継続課題となっている。

## (6) 職員研修の実施

・ 入職した新人職員に、事務局による研修、法人内他事業所への研修、介助初任者研修など、新人育成プランに基づく研修を実施した。また、昨年度より導入したWEB動画研修を使用した研修会も実施したが、各職員の階層に合わせた、より計画的な活用が求められている。
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## (7) その他（苦情・事故等）

① 事故 1件 積雪時、送迎バス1台の帰りのタイヤが、交通規制などの影響を受け大幅に乱れてしまった。
② ヒヤリハット9件 細かな事も情報共有し再発防止に取り組んでいこうという意向の表れで、昨年度より報告件数は増加傾向である。

③ 苦情 2件

台風対応に関する送迎バス時間変更の伝達タイミングに関する苦情と、利用者への普段の支援方法に関する苦情があった。

### 3 重点目標への取り組み・成果

① 高齢化に関わる支援への対応に向けた職員の知識向上

利用者の高齢化に伴う課題に関する知識向上を目指したが、研修コンテンツであるサポーターズカレッジを当初予定した程には活用できず、個々のケースの高齢化に伴う課題に対してそのつど対応する形となった。

② 伝える・伝わる支援

活動のつど利用者に意見を求めたり、振り返りの機会を設けて考えを述べてもらったりと、丁寧なコミュニケーションを目指した。その結果、利用者からの発言も多く引き出せたが、その一方で年度途中では支援の伝え方に関して、利用者より職員の伝え方に関する苦情が出る案件が発生するなど起きており、引き続き介助者側としてのより強い意識と向上心が求められる。

③ 地域生活を見据えた法人内外との多職種連携の強化

利用者の生活面での課題に関して、区職員やヘルパー事業所関係者、相談支援専門員らと連絡を取り合い、利用者を支える支援体制の一角としての動きに取り組んだ。結果、幾つかのケースでは、支援に関して次のステップを踏む為の行程に繋がるような有意義な取り組みとなった。

④ 新しい環境での支援や活動のあり方

昨年好評だったレザークラフト販売会では、販売対象を保護者やボランティア・知人だけでなく、地域住民にもチラシを配布し、より多くの来客を想定して行った。また玉堤との交流会についても、コロナ禍ではオンライン開催していたものを、東北沢より2名ずつ玉堤に訪問するという形で対面を再開した。その他にも、近所に買い物に行ったり、散歩したりする機会を徐々に設け、手探りながら徐々にコロナ禍後を意識した活動や行事を実施した。